国語

（問題）

2012年度

〈2012 H24060015（国語）〉

注意事項

1. 問題冊子および記述解答用紙は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
2. 問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
3. 解答はすべて解答用紙の所定欄にＨＢの黒鉛筆またはＨＢのシャープペンシルで記入すること。**欄外の余白には何も記入しないこと。**
4. 試験が開始されたらただちに、解答用紙の所定欄に、受験番号および氏名を正確に丁寧に記入すること。記述解答用紙の所定欄（二か所）には受験番号と氏名を、マーク解答用紙の所定欄（一か所）には氏名のみを記入すること。
5. マーク欄にははっきりマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと（砂消しゴムは使用しないこと）。

マークする時	●良い	◐悪い	◯悪い
マークを消す時	◯良い	◐悪い	◐悪い

6. いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

（一）

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人類が全体として取り組まなければならない大問題はいくつもある。戦争、宗教と文化の対立、貧困。そして、環境問題もそのひとつである。

二〇一一年三月に起きた東北関東地方での大地震で私たちは、地震と津波に打ちのめされると同時に、原子力発電の危険性をあまりに強烈な形で思い知らされた。この大災害には、人災の要素がもちろん存在し、長期的に私たちが環境とどのようにつきあっていくべきなのか、エネルギー問題のみならず、自然と社会のあり方が抜本的に問われている。私たちは、環境問題に関する後戻りできない地点として、この度の大地震の記憶を深く心に刻むであろう。

環境問題は、汚染による生態系の劣悪化、生物種の［A］、資源の［B］、廃棄物の［C］などの形であらわれている。その原因は、自然の回復力と維持力を超えた人間による自然資源の搾取にある。環境問題の改善には、思想的・イデオロギー的な対立と国益の衝突を超えて、国際的な政治合意を形成して問題に対処していく必要がある。

しかしながら、環境問題をより深いレベルで捉え、私たちの現在の自然観・世界観を見直す必要性もある。というのも、自然の搾取を推進したその理論的・思想的背景は近代科学の自然観にあると考えられるからだ。もちろん、自然の搾取は人間社会のトータルな活動から生まれたものであり、環境問題の原因のすべてを近代科学に押しつけることはできない。

しかしながら、近代科学が、自然を使用するに当たって強力な推進力を私たちに与えてきたことは間違いない。その推進力とは、ただ単に近代科学がテクノロジーを発展させ、人間の欲求を追求するための効果的な手段と道具を与えたというだけではない（テクノロジーとは、科学的知識に支えられた技術のことを言う）。それだけではなく、近代科学の自然観そのものの中に、生態系の維持と保護に相反する発想が含まれていたと考えられるのである。

近代科学とは、一七世紀にガリレオやデカルトたちによって開始され、次いでニュートンをもって確立された科学を指している。近代科学が現代科学の基礎となっていることは言うまでもない。近代科学の自然観には、中世までの自然観と比較して、いくつかの重要な特徴がある。

第一の特徴は、機械論的自然観である。中世までは自然の中には、ある種の目的や意志が宿っていると考えられていたが、近代科学は、自然からそれら精神性を剥奪し、ア定められた法則どおりに動くだけの死せる機械とみなすようになった。

第二に、原子論的な還元主義である。自然はすべて微小な粒子とそれに外から課される自然法則からできており、それら原子と法則だけが自然の真の姿であると考えられるようになった。

ここから第三の特徴として、[1]物心二元論が生じてくる。二元論によれば、身体器官によって捉えられる知覚の世界は、主観の世界である。自然に本来、実在しているのは、イ色も味も臭いもない原子以下の微粒子だけである。知覚において光が瞬間に到達するように見えたり、地球が不動に思えたりするのは、主観的に見られているからである。自然の感性的な性格は、自然本来の内在的な性質ではなく、自然をそのように感受し認識する主体の側にある。つまり、心あるいは脳が生み出した性質なのだ。

真に実在するのは物理学が描き出す世界であり、そこからの物理的な刺激作用は、脳内の推論、記憶、連合、類推などの働きによって、ウ秩序ある経験へと構成される。つまり、知覚世界は心ないし脳の中に生じた一種のイメージや表象にすぎない。物理学的世界は、人間的な意味に欠けた無情の世界である。

それに対して、知覚世界は、「使いやすい机」「嫌いな犬」「美しい樹木」「愛すべき人間」などの意味や価値のある日常物に満ちている。しかしこれは、主観が対象にそのように意味づけたからである。こうして、物理学が記述する自然の客観的な真の姿と、私たちの主観的表象とは、質的にも、存在の身分としても、まったく異質のものとみなされる。

これが二元論的な認識論である。そこでは、感性によって捉えられる自然の意味や価値は主体によって与えられるとされる。いわば、自然賛美の叙情詩を作る詩人は、いまや人間の精神の素晴らしさを讃える自己賛美を口にしなければならなくなったのである。こうした物心二元論は、物理と心理、身体と心、客観と主観、自然と人間、野生と文化、事実と規範といった言葉の対によって表現されながら、私たちの生活に深く広く浸透している。日本における理系と文系といった学問の区別もそのひとつである。二元論は、[2]没価値の存在と非存在の価値を作り出してしまう。

二元論によれば、自然は、エ何の個性もない粒子が反復的に法則に従っているだけの存在となる。オ時間的にも空間的にも極微にまで切り詰められた自然は、場所と歴史としての特殊性を奪われる。近代的自然科学に含まれる自然観は、自然を分解して利用する道をこれまでないほどに推進した。最終的に原子の構造を砕いて核分裂のエネルギーを取り出すようになる。自然を分解して（知的に言えば、分析をして）、材料として他の場所で利用する。近代科学の自然に対する知的・実践的態度は、自然をかみ砕いて栄養として摂取することに比較できる。

近代科学が明らかにしていった自然法則は、自然を改変し操作する強力なテクノロジーとして応用されていった。しかも自然が機械にすぎず、その意味や価値はすべて人間が与えるものにすぎないのならば、自然を徹底的に利用することに躊躇を覚える必要はない。本当に大切なのは、ただ［D］だけだからだ。こうした態度の積み重ねが現在の環境問題を生んだ。

だが実は、この自然に対するスタンスは、人間にもあてはめられてきた。むしろその逆に、歴史的に見れば、人間に対する態度が自然に対するスタンスに反映したのかもしれない。[3]近代の人間観は原子論的であり、近代的な自然観と同型である。近代社会は、個人を伝統的共同体の桎梏（しっこく）から脱出させ、それまでの地域性や歴史性から自由な主体として約束した。つまり、人間個人から特殊な諸特徴を取り除き、原子のように単独の存在として遊離させ、規則や法に従ってはたらく存在として捉えるのだ。こうした個人概念は、たしかに近代的な個人の自由をもたらし、人権の概念を準備した。

しかし、近代社会に出現した自由で解放された個人は、同時に、ある意味でアイデンティティを失った根無し草であり、誰とも区別のつかない個性を喪失しがちな存在である。そうした誰とも交換可能な、個性のない個人（政治哲学の文脈では「負荷なき個人」と呼ばれる）を基礎として形成された政治理論についても、現在、さまざまな立場から批判が集まっている。物理学の素粒子のように相互に区別できない個人観は、その人のもつ具体的な特徴、歴史的背景、文化的・社会的アイデンティティ、特殊な諸条件を排除することでなりたっている。

だが、そのようなものとして人間を扱うことは、本当に公平で平等なことなのだろうか。いや、それ以前に、近代社会が想定する誰でもない個人は、本当は誰でもないのではなく、どこかで標準的な人間像を規定してはいないだろうか。そこでは、標準的でない人々のニーズは、社会の基本的制度から密かに排除され、不利な立場に追い込まれていないだろうか。実際、マイノリティに属する市民、例えば、女性、少数民族、同性愛者、障害者、少数派の宗教を信仰する人たちのアイデンティティやニーズは、周辺化されて、軽視されてきた。個々人の個性と歴史性を無視した考え方は、ある人が自分の潜在能力を十全に発揮して生きるために要する個別のニーズに応えられない。

4 近代科学が自然環境にもたらす問題と、これらの従来の原子論的な個人概念から生じる政治的・社会的問題とは同型であり、並行していることを確認してほしい。

自然の話に戻れば、分解して個性をなくして利用するという近代科学の方式によって破壊されるのは、[E]であることは見やすい話である。自然を分解不可能な粒子と自然法則の観点のみで捉えるならば、自然は利用可能なエネルギー以上のものではないことになる。そうであれば、自然を破壊することなど原理的にありえないことになってしまうはずだ。

しかし、そのようにして分解的に捉えられた自然は、生物の住める世界ではない。自然を原子のような部分に還元しようとする思考法は、さまざまな生物が住んでおり、生物の存在が欠かせない自然の一部ともなっている生態系を無視してきた。

生態系は、そうした自然観によっては捉えられない全体論的存在である。生態系の内部の無機・有機の構成体は、循環的に相互作用しながら、長い時間をかけて個性ある生態系を形成する。エコロジーは博物学を前身としているが、博物学とはまさしく「自然史（ナチュラル・ヒストリー）」である。ひとつの生態系は独特の時間性と個性を形成する。そして、そこに棲息する動植物はそれぞれの仕方で適応し、まわりの環境を改造しながら、個性的な生態を営んでいる。自然に対してつねに分解的・分析的な態度をとれば、生態系の個性、歴史性、場所性は見逃されてしまうだろう。これが、環境問題の根底にある近代の二元論的自然観（かつ二元論的人間観・社会観）の弊害なのである。自然破壊によって人間も動物も住めなくなった場所は、そのような考え方がもたらした悲劇的帰結である。

（河野哲也『意識は実在しない』による）

問一 空欄 [A]・[B]・[C] に入る組み合わせとして、最も適切なものを次の**ア**～**オ**の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア A 滅亡　B 稀少　C 腐敗
イ A 絶滅　B 荒廃　C 処理
ウ A 稀少　B 減少　C 増加
エ A 減少　B 枯渇　C 累積
オ A 消失　B 濫用　C 汚染

問二 傍線部1「物心二元論が生じてくる」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の**ア**～**オ**の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア 近代の科学技術によって自然がその姿を大きく変化させて、私たちにはもはやもともとの自然の姿を感じとることができなくなってしまったため。
イ 自然は目に見えない粒子と一定の法則によって成り立っており、私たちが実際に知覚する世界とは異なるものだという見方が広がっていったため。
ウ 独自の意識や目的をもったものとして自然をとらえる見方と、自然が意思をもたずにただ存在している見方と、二つの立場が近代に生まれたため。
エ 自然は、それを見る人の立場によってそれぞれ異なった見え方をするものであり、見る人の数だけの自然が存在するという考え方が普及したため。
オ 自然の中に存在する事物のうちには、私たち人間にはとらえることのできない目的や意思が含まれていることが意識されるようになったため。

問三 傍線部2「没価値の存在と非存在の価値」とあるが、本文の波線部**ア**～**オ**のうち、著者が「非存在の価値」としてとりあげているものはどれか。最も適切なものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア 定められた法則どおりに動くだけの死せる機械
イ 色も味も臭いもない原子以下の微粒子
ウ 秩序ある経験
エ 何の個性もない粒子
オ 時間的にも空間的にも極微にまで切り詰められた自然

問四　空欄 D に入る語句として、最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア　客観性、実在
イ　まわりの環境、自然
ウ　自然の法則、人間
エ　テクノロジー、機械
オ　人間の主観、心

問五　傍線部3「近代の人間観」とあるが、筆者はそれがどのような事態を引き起こしたと述べているか。その説明として**適切でないもの**を、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア　人々が各自の欲求にしたがって生きるようになり、共通の法や秩序を各自の都合のよいように解釈するようになった。
イ　人々がそれぞれにもっている特性を、大多数の人がもっている考え方や生き方に合わせるようになった。
ウ　人々が、自分の属する集団や地域にとってどのような役割を果たしていくべきかを見出しにくくなった。
エ　人々がそれぞれにもっている多様な個性を、標準的なものとそうでないものとにわける見方を生み出した。
オ　人々を集団の中の伝統的な役割から解き放ち、仕事や生き方を各自が自由に選ぶことができるようになった。

問六　傍線部4「近代科学が…同型であり、並行している」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア　原子論的な自然観が、生物同士の細かい特徴や個別性を意識するような態度を生んだように、原子論的な人間観は、自分が他者と異なることに絶えず不安を感じるような社会を生み出した。
イ　原子論的な自然観が、自然を分解したり改変したりする態度を生み出したように、原子論的な人間観は、人間の身体や器官を人工的に直したり、交換したりするような社会を生み出した。
ウ　原子論的な自然観が、目的や意思をもたないものとして自然を扱う態度を生んだように、原子論的な人間観は、人間が共通してもっている思想や意思を抑圧する社会を生み出した。
エ　原子論的な自然観が、自然の予測や計算が可能であるという態度を生んだように、原子論的な人間観は、人間の行動を予測し、ごく少数の人の欲求にまで対応する社会を生み出した。
オ　原子論的な自然観が、生物の固有性や生物同士の関係を軽視する態度を生んだように、原子論的な人間観は、人々の個別の経験や欲求を軽視するような社会を生み出した。

問七　空欄 E に入る三文字の言葉を本文中より抜き出し、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問八　本文全体の趣旨に合致するものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア　環境問題の改善には、それぞれの国が文化的・社会的アイデンティティや国益などにこだわることなく、国際的な政治合意を形成しなくてはならない。
イ　近代科学は、自然を利用し、環境を変えていく強力なテクノロジーを私たちにもたらしてきたのであり、それをより強力に推し進めることが、環境問題を解決することになる。
ウ　環境の問題には、国境を越えた合意形成が必要であり、地球規模で取り組まなければならない問題であるが、まずその根底にある近代の自然に対する見方、考え方を問い直す必要がある。
エ　私たちが自然に対して抱いている美しさや心地よさといったものは、それを感じている人間が主観的に生み出したものにすぎず、現代の環境問題に正面から取り組むために重要なのはむしろ、そうした主観を排した客観的で科学的なアプローチである。
オ　博物学には、自然を分解し、原子としてとらえる近代の自然観が含まれており、博物学を前身として生まれたエコロジーも、生物の多様性や歴史性を考えるに充分な考え方とは言えない。

（二）

次の文章は、大正九年（一九二〇年）に発表された寺田寅彦の随筆「自画像」の一部である（省略した箇所や表記をあらためた箇所がある）。これを読んで、後の問いに答えよ。

手近な静物や庭の風景とやっているうちに、描く物の種がだんだんに少なくなって来た。本当は同じ静物でも風景でも排列や光線や見方をちがえればいくらでも材料にならぬ事はないが、素人の初学者の自分としては、少なくも一わたりは色々ちがった物が描いてみたかった。一番描いてみたいのは野外の風景であるが、今の病体ではそれは断念する外はなかった。それでとうとう自画像でも始めねばならないようになって来た。一体自分はどういうものか、従来肖像画というものには［A］興味を感じないし、殊に人の自画像などには一種の原因不明な反感のようなものさえもっているのであるが、それにもかかわらず遂に自分の顔でも描いてみる気になってしまった。

それである日鏡の前に座って、自分の顔をつくづく見てみると、顔色が悪くて頬がたるんで眼から眉の辺や口許にはメイジョウの出来ない暗い不愉快な表情が泛うているので、描いてみる勇気が一時になくなってしまった。そのうちにまた天気のいい気分の好い折に小さな鏡を机の前に立てて見たら、その時は鏡の中の顔が晴れ晴れとしていて眼もどことなく活気を帯びて、前とは別人のような感じがした。それでさっそく一番小さなボール板へ写生を始めた。鉛筆でザッと下図をかいてみたがなかなか似そうもなかった、しかし構わず絵具を付けているうちに間もなく［B］人の顔らしいものが出来た。のみならず［C］いくらかは自分に似ているような気もした。顔の長さが二寸くらいで塗りつぶすべき面積が狭いだけに思ったよりは雑作なく顔らしいものが出来た、と思ってちょっと愉快であった。それでさっそく家族に見せて回ると、似ているという者もあり、似ていないというものもあった。無論これはどちらも正しいに相違なかった。

このはじめての自画像を描く時に気のついたのは、鏡の中にある顔が自分の顔とは左右を取りちがえた別物であるという事である。これは物理学上からは極めて明白な事であるが、写生をしているうちにはじめてその事実が本当に体験されるような気がした。衣服の左り前なくらいはいいとしても、また髪の毛の撫で付け方や黒子の位置が逆になっているくらいはどうでもなるとしても、もっと微細な、しかし重要な眼の非対称や鼻の曲りやそれを一々左右顚倒して考えるという事は非常に困難な事である。[1]要するに一面の鏡だけでは永久に自分の顔は見られないという事に気が付いたのである。二枚の鏡を使って少し斜めに向いた顔を見る事は出来るだろうがそれを実行するのはおっくうであったし、また自分の技量で左右の相違を描き分ける事も出来そうになかった。そんな事を考えなくてもただ鏡に映った顔を描けばいいと思ってやっているうちに着物の左衽の処でまたちょっと迷わされた。自分の科学と芸術とは見たままに描けと命ずる一方で、何だか絵として見た時に不自然ではないかという気もするし、年取った母が嫌がるだろうと思ったので、とうとう右衽に胡魔化してしまったが、[2]それでもやっぱり不愉快であった。

この自画像No.1は恐ろしく皺だらけのしかみ面で上眼に正面を睨み付けていて、如何にも性急な癇癪持の人間らしく見えるが、考えてみると自分にもそういう資質がないとは云われない。

それから二、三日たってまた第二号の自画像を前のと同大の板へ描いてみた。今度は少し顔を斜めにしてやってみると、前とは反対に大変温和な、のっぺりした、若々しい顔が出来てしまった。妻や子供等はみんな若過ぎると云って笑ったが、母だけはこの方がよく似ていると云った。母親の眼に見える自分の影像と、子供等の見た自分の印象とには、事によったら十年以上も年齢の差があるかもしれない。それで思い出したが、近頃自分の高等小学校時代に教わったきりで逢わなかった先生方の写真を見た時にちょっとそれと気がつかなかった。写真の顔が［A］若すぎて子供のような気がしたからである。よくよく見ているとありありと三十年前の記憶が呼び返された。これから考えると吾々の頭の中にある他人の顔は自分と一緒に、しかもちゃんときまった年齢の間隔を保持しつつだんだん年をとるのではあるまいか。

同じ自分が同じ自分の顔を描くつもりでやっていると、その時々でこのように色々な顔が出来る、これはつまり写生が拙なためには相違ないが、［B］面白い事だと思った。No.1にもNo.2にもどこか自分に似たところがあるはずであるが、1と2を並べて比較してみると、どうしても別人のように見える。そうしてみると1と2がそれぞれ自分に似ているのは、顔の相似を決定すべき主要な本質的の点で似ているのでなくて第二義以下の枝葉の点で似ているに過ぎないだろうと思われる。

これについて思い出す不思議な事実がある。［X］たしかに面白い問題になるに相違ないと思った。それからまた一方では親子の関係というものの深刻な意味を今更のように考えたりした。

一体二つの顔の似ると似ないを決定すべき要素のようなものは何であろう。この要素を分析し抽出する科学的の方法はないものだろうか。自分は自画像を描きながらいろんな事を考えてみた。同じ大きさに同じ向きの像を何十枚も描いてみる。そしてそれを一枚一枚写真にとって、そのおのおのを重ね合せて重ね撮り写真をこしらえる。もしおのおのの絵が実物とちがう「違い方」が物理学などでいう誤差の法則に従って色々に分配せられるとすれば、重ね撮りの結果は丁度「平均」をとる事になってそれが実物の写真と同じになりはしまいか。もしそれが実物と違えばその相違は書き手に固有ないわゆる personal equation（注②）を示すか、あるいはその人の自分の顔に対する理想を暴露するかもしれない。それはとにかく何十枚の肖像を大体似ている度に応じて二つか三つくらいの組に分類する。そうしてその一つ一つの写真を本物の写真と重ねてみてよく一致する点としない点とをいくつかの箇条に分かって統計表をこしらえる。こんな方法でやれば[3]「顔の相似」という不思議な現象を系統的に研究する一つの段階にはなりそうである。

自画像はNo.2でしばらくやめてまた静物などをやっているうちに、一日、画家のT君が旅行から帰ったと云ってわざわざ自分の画を見に来てくれた。有り丈けの絵をみんな出して見てもらって色々の注意を受け、色々の面白い事を教わって大変にケイハツされるような気がした。自画像の二枚については、［A］色が白過ぎるというのと、もっと細かに見て、色や調子を研究して根気よく描かなければいけないというのであった。なるほどそう云われてみると自分の描いた顔は普通の油絵らしくなくて淡彩の日本画のように白っぽいものである。［D］鏡が悪いために実際いくぶん顔色が白けて見えたには相違ないが、そう云われて後に鏡と画と較べてみると画像の方はたしかに色が薄くて透明に見えて、上簇期（注③）の蚕のような肌をしていた。そして如何にもぞんざいで薄っぺらなものに思われて来た。それからT君は色々の話のうちにトーンというものの大切な事を話した。眼を細くしてよく見極めをつけてから一筆ごとに新しく絵具を交ぜては置いていくのだそうである。ある人は六尺もある筆の先へちょっと絵具をくっつけて、鳥でも刺すようにして一点くっつけてはまた眺めて考え込むというのである。この話を聞いているうちに何だか非常に愉快になって来た。

そういう仕事をしている画家と、非常にデリケートな物理の実験をやって敏感な螺子(ねじ)をいじっては眼鏡を覗いている学者と全く兄弟分のような気がして面白くなって来た、そしてどういう訳か急に可笑(おか)しくなって笑い出すとT君も一緒に笑い出してしまった。

それから二、三日経ってT君の宅へ行って同君の昔描いた自画像を二枚見せてもらった。それは小さな板へ描いた習作であったがなるほど濃厚な絵具をベタベタときたならしいように盛り付けたものであった。しかし自分ののっぺりした絵と比べてみるとこの方が比較にならぬほどいきいきしていて真黒な絵具の底に熱い血が通っていそうな気がした。

D　考えてみるとこのくらいの事は今はじめて知った訳ではない。この自分の自画像がもし他人の絵であったとしたらおそらくはじめからまるで問題にならないで打っちゃってしまうほどつまらないものかもしれない。ただそれが自分の描いたのであるがためにこんな分かりきった事が分からないでいたのをT君の像を眺めているうちにやっとの事で明白に実認したに過ぎない。一体自分は、多くの人々と同様に、自分の理解し得ないものを「つまらない」と名づけたり、自分と型のちがった人を「常識がない」と思ったりするような事がかなりありそうであるが、幸いにあるいは不幸にして、自分の絵を一つの単純な絵として見て玄人(くろうと)のと比較する時に、自分の方がいいと思い得るほどの自信がないと見えて、T君の画と説とにすっかり感心してしまった。そうして頭を新しく入れ換えて第三号の自画像に取りかかる事にした。

注　①　左衽…ここでは「左前」と同じ着物の着方を指す。このような着方は、普通とは反対で、死者の装束に用いられたために、不吉なものとされた。

②　personal equation…観察や判断において、個々人において生ずる誤差のこと。個人誤差。

③　上簇期…養蚕業で、十分成長した蚕に繭を作らせるため、「簇(まぶし)」と呼ばれる道具に移す時期のこと。

問九　二重傍線部**甲**・**丁**に該当する漢字を、記述解答用紙の所定の欄に楷書で記せ。

問十　二重傍線部**乙**・**丙**と同じ意味の語として適切なものを、次の**ア**～**オ**の中からそれぞれ一つずつ選び、解答欄にマークせよ。

乙　雑作なく
　ア　適切に　**イ**　容易に　**ウ**　そっくりに　**エ**　上手に　**オ**　丁寧に

丙　おっくう
　ア　至難　**イ**　退屈　**ウ**　面倒　**エ**　不愉快　**オ**　不利益

問十一　空欄 A ～ D に入る語の組み合わせとして適切なものを、次の**ア**～**オ**の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

	A	B	C	D
ア	あまり	ともかくも	やはり	もっとも
イ	それほど	どうにか	やはり	よくよく
ウ	それほど	なんとか	そもそも	やはり
エ	あまり	ともかくも	それでも	まったく
オ	もっとも	なんとか	そもそも	まったく

問十二　傍線部1「要するに一面の鏡だけでは永久に自分の顔は見られない」とあるが、これはどういうことか。最も適切なものを、次の**ア**～**オ**の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア　二枚以上の鏡を使わないかぎり、ふだんは気づくことのない自分の新たな側面を発見することは不可能であるということ。
イ　自分の顔は、ふだん見ることができないために、鏡に映った姿を一瞬見た程度では、それと気づくことができないということ。
ウ　鏡のような道具を使った認識は物理学的には可能であっても、それらによって対象（顔）の本質をとらえることはできないということ。
エ　鏡に映った像は、自分の一面を映すに過ぎず、他の視点からの像と見比べなければ、自分の本当の姿に迫ることはできないということ。
オ　鏡に映った顔は左右が反転した別物だといってよく、自分の能力だけで微細な点までそれを補正し、正確な姿を認識することは不可能だということ。

問十三　傍線部2「それでもやっぱり不愉快であった」とあるが、筆者がそのように感じた理由として最も適切なものを、次の**ア**～**オ**の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア　鏡を使って描くのは、自分の画力からしてやむを得ない手段ではあったが、それでは対象である自らの顔と向き合っていることにならないと感じられたから。
イ　社会通念や常識に従って描いてはみたものの、科学と芸術に対する自分の見方に照らして、観察した姿とはちがうように描いてしまったという気持ちが残ったから。
ウ　科学者としての自分に一定以上の自負を持ってきたにもかかわらず、自らが持つ科学的常識と社会通念や道徳とのあいだの矛盾を解消できないことに気づかされてしまったから。
エ　自分の感じる不自然さにしたがって、鏡に映ったとおりでなく、左衽になるように自画像を描いてみたものの、自分には似ていると思えず、自らの画力不足を痛感することになったから。
オ　鏡に映った通りを描いた左衽の自画像は、見たままに描くという自分の科学者としての姿勢からは必然的ではあるが、表情の非対称性ゆえに、やはり本来の自分との違いを意識させられたから。

問十四　空欄 X 　には、次のア～オの五文が入る。正しい順序に並べかえ、その順に記号を記述解答用紙の所定欄に記せ。

ア　ある時電車で子供を一人連れた夫婦の向い側に座を占めて無心にその二人の顔をながめていたが、固より夫婦の顔は全くちがった顔で、普通の意味で少しも似た処はなかった。

イ　このような現象を心理学者はどう説明するだろうか。

ウ　父親のどこと母親のどことを伝えているかという事は容易に分かりそうもなかったが、とにかく両親のまるでちがった顔が、この子供の顔の中で渾然と融合してそれが一つの完全な独立な極めて自然的な顔を構成しているのを見て非常に驚かされた。

エ　そのうちに子供の顔を注意して見ると、その子は非常によく両親のいずれにも似ていた。

オ　それよりも不思議な事は、子供の顔を注視して後に再び両親の顔を見較べると、はじめ全く違って見えた男女の顔が交互に似ているように思われて来た事である。

問十五　傍線部3「顔の相似」をめぐる説明として、最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア　「顔の相似」ということは当たり前のことのように考えられるが、考えてみればよく分からない不思議な現象で、親子の関係に深刻な問題を投げかけるばかりでなく、何枚もの自画像を描くことによって、自己のアイデンティティの分裂といった危機をももたらすことになる。

イ　子供の顔を介して血のつながりのない両親の顔も似てくるという「顔の相似」に関する不思議な現象は、遺伝学など自然科学の研究ばかりでは説明がつかず、心理学などの方法も取りこみながら、系統的に行うことによってはじめて解明することができるようになり、自画像にかかわる問題も解決されることになる。

ウ　今日までのところ現代科学の方法では「顔の相似」ということを簡明に説明することができないが、これまで進歩を遂げてきた物理学と同様、この現象を統計的に研究することでその法則を把握することができるならば、自画像の描法を確立できるばかりでなく、人間の心理の解明にも大きく寄与することが可能となる。

エ　「顔の相似」ということは不思議な現象で、二つの顔が似ると似ないということを決定する要素が何かは分からないが、数多くの自画像を描き、その写真を重ね合わせることによってその「平均」をとったところに、自画像を描く人間の自分の顔に対する理想が暴露されることになる。

オ　自画像を描くことによって意識させられるようになった「顔の相似」という現象は、これほど発達した現在の科学でも充分に解明されていないが、それを考察するためには自然科学一般と等しく、比較と分類によって共通点と相違点を徹底的に洗い出して、統計的に処理することが必要である。

問十六　自画像を描く経験を通して筆者が認識した内容として誤っているものを、次のア～オの中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

ア　両親の顔と子供の顔とは、表面的な枝葉の違いを超えて、つねに本質的な点で似通っており、そのことは、親子の絆の切り離しがたさを示しているということ。

イ　芸術家たちはつねに対象の全体を意識しており、科学者である自分の画が不十分なのは、細部の形やトーンばかりを追って、全体像を見ることがないからだということ。

ウ　トーンを軽視した絵画は薄っぺらであり、対象を観察しつつ、一筆ごとに絵具を重ねていった絵は、きたならしく塗りつけたように見えても、いきいきとしたものになるということ。

エ　芸術領域に属する画家の営みと、科学者である物理学者の営みとは、一見まったく無縁に見えるが、対象の観察と試行錯誤の繰り返しにもとづいているという点ではひどく似通っているということ。

オ　われわれが他人の顔に対して持っている印象は、その人の実年齢を反映しているばかりでなく、自分の記憶の中の印象をも反映しているということ。

問十七　寺田寅彦は熊本の第五高等学校時代の英語教師から俳句の手ほどきを受けたが、その英語教師はやがて小説家となり、『吾輩は猫である』で「首縊りの力学」を説く水島寒月、『三四郎』では大学の実験室で「光線の圧力の試験」をする野々宮宗八のモデルとして教え子の寺田寅彦を使った。この小説家とは誰か、そのフルネームを漢字（楷書）で、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

（三）

次の文章は『源氏物語』の一節で、浮舟のもとを中将が訪れる場面である。入水後助けられた浮舟は横川の僧都の妹尼と暮らしていた。中将来訪時、妹尼は不在で、少将の尼という人物が応対した。これを読んで、後の問いに答えよ。

「月さし出でてをかしきほどに、昼、文ありつる中将おはしたり。あなうたて、こはなぞ、とおぼえたまへば、奥深く入りたまふを、「さもあまりにもおはしますかな。御心ざしのほども、あはれまさるをりにこそはべるめれ。ほのかにも、[1]聞こえたまはんことも聞かせたまへ。しみつかんことのやうに思しめしたるこそ」など言ふに、いとうしろめたくおぼゆ。おはせぬよしを言へど、昼の使の、一ところなど問ひ聞きたるなるべし、いと言多く恨みて、ⅰ「御声も聞きはべらじ。ただ、け近くて聞こえんことを、聞きにくしとも思しことわれ」と、よろづに言ひわびて、ⅱ「いと心憂く。所につけてこそ、もののあはれもまされ。あまり[2]かかるは」などあはめつつ、

A　「山里の秋の夜ふかきあはれをものの思ふ人は思ひこそ知れ
おのづから御心も通ひぬ(ア)べきを」などあれば、ⅲ「尼君おはせで、紛らはしきこゆべき人もはべらず、いと世づかぬやうならむ」と責むれば、

B　うきものと思ひも知らですぐす身をもの思ふ人と人は知りけり

わざと言ふともなきを、聞きて伝へきこゆれば、いとあはれと思ひて、ⅳ「なほ、ただ、いささか出でたまへと聞こえ動かせ」と、この人々をわりなきまで恨みたまふ。ⅴ「あやしきまで、つれなくぞ見えたまふ(イ)」とて、入りて見れば、例はかりそめにもさしのぞきたまはぬ老人の御方に入りたまひにけり。あさましう思ひて、[3]かくなん、と聞こゆれば、「かかる所にながめたまふ　C　心の中のあはれに、[4]おほかたのありさまなども情なかるまじき人の、いとあまり思ひ知らぬ人よりもけにもてなしたまふめるこそ。それももの懲りしたまへるか。なほ、いかなるさまに世を恨みて、いつまでおはすべき人ぞ」などありさま問ひて、いとゆかしげにのみ思いたれど、こまかなることは、いかでかは言ひ聞かせん、ただ、「知りきこえたまふべき人の、年ごろはうとうとしきやうにて過ぐしたまひしを、初瀬に詣であひたまひて、尋ねきこえたまへる」とぞ言ふ。

姫君は、いとむつかしとのみ聞く老人のあたりにうつぶし臥して、寝も寝られず。宵まどひは、えもいはずおどろおどろしきいびきしつつ、前にも、うちすがひたる尼ども二人臥して、劣らじといびきあはせたり。いと恐ろしう、今宵この人々にや食はれ(ウ)なんと思ふも、惜しからぬ身なれど、例の心弱さは、一つ橋危がりて帰り来たり　D　者のやうに、わびしくおぼゆ。注こもき、供に率ておはしつれど、色めきて、このめづらしき男の艶だちゐたまへる方に帰り往(エ)にけり。今や来る、今や来ると待ちゐたまへれど、いとはかなき頼もし人なりや。

中将、言ひわづらひて帰りに(オ)ければ、「いと情なく、埋もれてもおはしますかな。[5]あたら御容貌を」など譏りて、みな一所に寝ぬ。

注　こもき……女童の名前。

問十八　傍線部1「聞こえたまはんことも聞かせたまへ」を、それぞれの動作の主語を明示して現代語訳し、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問十九　会話文ⅰ～ⅴの中で、少将の尼が主体として話しているものはどれか。次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア　ⅰとⅲ　　イ　ⅱとⅳ　　ウ　ⅲとⅴ　　エ　ⅰとⅱとⅲ　　オ　ⅱとⅲとⅴ

問二十　傍線部2「かかる」の意味として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア　浮舟のすげない態度に中将が恨みを言いすぎること
イ　中将の思いを浮舟がまったく聞こうともしないこと
ウ　浮舟がひとりにされてあまりに心細そうにしていること
エ　初対面の浮舟に対して中将があまりに深く思いすぎること
オ　秋の夜といい山里といい、時も所も風情がありすぎること

問二十一　Bの歌「うきものと思ひも知らですぐす身をもの思ふ人と人は知りけり」は、Aの歌「山里の秋の夜ふかきあはれをものの思ふ人は思ひこそ知れ」に対してのどんな返答になっているか。最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア　Aでお互いに「もの思ふ人」だと決めつけていることに対して、私のことを悩みのある人だとよく知っていますねと切り返した。
イ　Aが恋の悩みで秋の情趣も解さないと責めたのに対して、もののあはれを知っている「もの思ふ人」だと言ったのはあなただと切り返した。
ウ　Aが「もの思ふ人」はもののあはれを知っていると言ったのを、言われてみるとたしかにそうで、私の心の内をよく知ってくれていると共感した。
エ　Aで秋の夜の風情があはれだと言っているのに共感して、普段はあまり風情を解しない私も今日はことさら「もの思ふ人」になっていると応じた。
オ　Aが「山里の秋の夜ふかきあはれ」とこの場所の今の様子を決めつけているのに対して、そんな「うきもの」だとは思ってみなかったと切り返した。

問二十二　二重傍線部ア～オの中に、一つだけ文法的に異なるものがある。その記号を一つ選び、解答欄にマークせよ。

問二十三　傍線部3「かくなん」が具体的に指している部分を抜き出し、その初めと終わりの三文字を記述解答用紙の所定の欄に記せ（句読点は含まない）。

問二十四　空欄C、Dには助動詞「らむ」または「けむ」が入る。それぞれに合う助動詞を適切な形にして、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問二十五　傍線部4「おほかたのありさまなども情なかるまじき人の、いとあまり思ひ知らぬ人よりもけにもてなしたまふめるこそ」はどのようなことを述べているか。最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア　情緒過多に思える人が非情な人よりも優しく接してくれるのは当然のことだということ。
イ　冷淡な様子の人が恋の情趣を解する人よりもほんとうは熱い思いを秘めているということ。
ウ　情を解するように見える人が解さない人よりもひどい応対をするのは理解に苦しむということ。
エ　優しそうな人が引っ込み思案な人よりも隠れて出てこないのは気分を害しているためだということ。
オ　教養がありそうな人が無教養な人よりも思わせぶりな態度をとるのはかえって興ざめだということ。

問二十六　傍線部5「あたら御容貌を」に込められた尼の気持ちとして、最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア　せっかく美しい顔立ちをしているのに、話ができないのではこのまま山里に埋もれてしまうと非難している。
イ　美しい顔立ちをしているために、わざわざ訪れた人にもすげない態度を取ってしまうのだと惜しいと思っている。
ウ　言い寄られても、ただ嫌がっているだけでは、こんなに美しい顔も台無しの顔になってしまうとたしなめている。
エ　せっかく美しい顔立ちをしているのに、あっさりと帰ってしまうなんて思いを埋もれさせるだけだと残念がっている。
オ　あまりに美しい顔立ちをしているだけに、人並みの対応ができないでいることが目立ってしまうと情けなく思っている。

問二十七　本文と合致する内容として、最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

ア　老人達は中将に関心を抱いていたため、わざと浮舟を恐がらせるような行動を繰り返した。
イ　中将に思いを寄せていた女童は、浮舟に嫉妬して、自分が浮舟よりも艶っぽい女性であるように振る舞った。
ウ　中将は心優しい理想的な人物で、浮舟に同情し、この醜悪な環境から早く救ってあげたいと強く望んでいた。
エ　中将は浮舟に好意を持ち、彼女のことを少将の尼に尋ねたが、はぐらかされるような答えしか得られなかった。
オ　浮舟は内心中将に心惹かれながらも、過去の不幸な経験によって男性への不信感をぬぐえずわざと拒絶する態度に出た。

（四）

次の文を読んで、後の問いに答えよ。なお、設問の都合上、返り点、送り仮名を省いた箇所がある。

隆[注①]徳府屯留県ノ王誥、字ハ宣叔、少クシテ習レ文ヲ、応ズ二進士ノ挙ニ。以テ家貧シキヲ訓ヲ幼学ヲ為レ業ト、屢ミ取ル二郷薦ヲ。而レドモ於イテ[注②]省試ニ輒チ不レ利アラ。毎ニ赴ク二省試ニ、必ズ夢ニ胡僧ヲ。姿状雄偉ニシテ、謂ヒテ曰ク、「君ガ此ノ行徒ナル労ナル耳。君ノ骨相雖モ主ニ有リト才、而レドモ不レ応ニ得ニ禄位ヲ。寿ハ可シ過グ二耳順ヲ。外レ是ヨリ、非ザル余ノ所ニ知ル也ト」。年五十余、又将ニ赴ク二省試ニ、夢ニ前ノ僧ヲ、相賀シテ曰ク、「君ガ是ノ挙必ズ登ルコト第ニ無シト疑ヒ矣」。夢中詰レ之ヲ曰ク、「師向語我不当得禄位。今乃チ云フハ登ルト第ニ、何ゾ也ト」。僧曰ク、「以テ君教ヘ導スルニ童子ヲ、用フルコトヲ心ヲ篤ニシテ至ル、不ル負ハ其父母所ニ託ス、為ス有リト二陰徳ニ、故ニ天益シテ君ガ[注③]算ヲ而レドモ報ユルニ君ニ以テ禄位ヲ」。因リテ引キテ至リ一官府ニ、指サシテ庭下ニ所ノ陳ズル古楽器ヲ曰ク、「君姑記レ之、異時当ニ自悟ル也」。厥ソ後モ亦タ数ミ有リ夢ニ、但ダ其ノ僧不ニ復ハ見レ、而レドモ所ノ陳ズル楽器ハ如シ初メノ。時ニ蜀[注④]公方ニ献ジ二新楽ヲ、詔ス於イテ[注⑤]延和殿ニ、[注⑥]按試スル上ニ。誥ス意ヲ[注⑦]延ニ試ル逮ビ二試日ニ、所ノ得ル賦題、乃チ「楽調四時和ス」也。是ノ歳、始メテ預リ二正奏名ニ、遂ニ於イテ[注⑧]馬涓榜下ニ賜ハル第ヲ。歴官数任ニシテ、以テ奉議郎ヲ致シ仕ヘ、年七十有七ニシテ、卒ス二於家ニ。[注⑨]潞人能ク言フ二此ノ事ヲ者甚ダ多ク、因リテ為ニ記ス之ヲ。

（朱弁『曲洧旧聞』より）

注 ① 隆徳府屯留県…今の山西省屯留県。 ② 省試…都で行われる科挙の最終試験。 ③ 算…ここでは、寿命の意。 ④ 蜀公…范鎮のこと。 ⑤ 延和殿…皇宮のなかにある宮殿の一つ。 ⑥ 按試…演奏させて試聴すること。 ⑦ 廷試…省試に同じ。 ⑧ 馬涓榜下…馬涓（人名）が主席合格した試験、の意。 ⑨ 潞…隆徳府の別名。

問二十八 傍線部1「師向語我不当得禄位」は、次のように読み下す。この読み下し文になるように、記述解答用紙の白文に返り点を付けよ。ただし、送り仮名は付けないこと。

シサキニワレマサニロクキヲウベカラズトカタレリ

問二十九 傍線部2「不負其父母所託」の意味として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号をマークせよ。

ア 童子たちの両親の大きな期待を裏切ることがなかった。
イ 童子たちの両親があれこれ口出しするのに屈しなかった。
ウ 童子たちが両親を背負っていけるだけの実力をつけさせた。
エ 童子たちに両親の期待に沿うよう教育することを忘れなかった。
オ 童子たちに両親の重い期待に負けない精神力を身につけさせた。

問三十 傍線部3「君姑記之、異時当自悟也」の訳として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号をマークせよ。

ア 君がひとたびこのことを記録したならば、後世の人々はきっと君のことを深く理解するに違いない。
イ 君はひとまずこのことを覚えておきなさい。将来のいつか、その意味することをはっと悟るであろう。
ウ 君がたとえこのことを記録したとしても、時代が違えば意味がなくなることを、きっと悟るであろう。
エ 君は必ずやこのことを記憶にとどめなさい。後でよくよく考えて、その真意を悟るべく精進しなさい。
オ 君の姑（しゅうとめ）はこのことをよく覚えている。次に不思議なことが起きた時に、君自身がそれを思い知るだろう。

問三十一　傍線部４「凡古今楽事、無不経意者」意味のとして最も適切なものを、次の**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号をマークせよ。

ア　おおよそ古今の娯楽に関わる事柄を、彼はすべて調べて把握した。
イ　おおよそ古今の楽して成功できる術について、彼はすべて知りつくした。
ウ　おおよそ古今の音楽すべてについて、彼は細大もらさず理解し演奏してみた。
エ　おおよそ古今の音楽に関わる問題で、彼が注意して考えないものは何一つなかった。
オ　おおよそ古今のすべての楽しい遊興について、彼はいつも想像をふくらませては楽しんだ。

問三十二　この本文の内容に**合致しないもの**を、次の**ア**～**オ**の中から一つ選び、その記号をマークせよ。

ア　胡僧の夢のお告げによって、王誥は何度も落第した科挙の試験に合格し、役人になれた。
イ　王誥はとても信心深かったので、胡僧が夢にしばしば現れ、たくさんの有益な助言を与えた。
ウ　胡僧は夢の中で王誥をとある役所に連れて行き、そこである光景を見せて、科挙の試験問題を暗示した。
エ　王誥が熱心に児童に勉強を教えたため、天はその真摯な姿勢に感じ入り、彼の運勢をよりよいものに変えた。
オ　王誥の家は貧しく、もっぱら受験勉強に勤しむゆとりがなかったため、児童に勉強を教えることで生計を立てていた。

〔以下余白〕